

Title	小特集 徳川貨幣史への新視角：編集者まえがき
Sub Title	Symposium: new approaches to Tokugawa monetary history : introduction
Author	斎藤, 修
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1980
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.73, No.3 (1980. 6) ,p.382(62)- 383(63)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集 徳川貨幣史への新視角
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19800601-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小特集 徳川貨幣史への新視角

編集者まえがき

本特集は、徳川期の貨幣史を対象とした論文4篇を取める。ここで「貨幣史」というのは、伝統的な日本史研究でいうところの「貨幣の歴史」より広義である。すでに相当程度貨幣経済化していた徳川時代に使用されていた貨幣には、金銀銭の三貨の他に紙幣（藩札）があったが、それらの貨幣の機能、価値、需給関係、さらには経済の実物的面への影響をも対象として取上げる。すなわち、徳川経済のマネタリーな側面を扱うという意味での「貨幣史」である。

本特集をくむにいたった経緯を簡単に説明しておく。まず第一のきっかけとなったのが、一昨年に出版された新保博著『近世の物価と経済発展』であった。これは、たんに幕府の貨幣・財政政策、貨幣相場、利子率といったマネタリーな問題を対象とした研究というだけでなく、物価を正面から取上げることによって、徳川経済の実物的側面における発展をも視野におさめた、これまでの日本経済史研究における最も包括的な業績である。この業績が徳川経済史研究におけるランドマークをなすという点、およびそれがこれからの貨幣・物価史研究にとって出発点となるという点において、誰しも異存はないであろう。本特集中の斎藤論文、西川・谷村論文、岩橋論文は、したがって、直接・間接に、この『近世の物価と経済発展』への論評となっている。

第二のきっかけとなったのは、1979年12月に行われた数量経済史研究会議での岩橋勝教授の報告「徳川後期の『銭遣い』について」であった（それは、本特集に、報告者による若干の加筆の上収録されている）。この論文は、新保教授も含めて従来前提とされてきた、東日本における金遣い、西日本における銀遣いという図式に疑問を投げかけるもので、それら2つの経済圏とならんで、西南地域における「銭遣い経済圏」の存在という仮説を提示している。いうまでもなく、もしこの仮説が正しいとすれば、その意味するところはきわめて大きい。

西川・谷村論文は、新保教授の『近世の物価と経済発展』では殆ど取り上げられることのなかった藩札を、山口藩と広島藩を中心に考察している。古典的な貨幣数量説によるアプローチを意識的に行った分析であり、後段ではこの分野における最初のクリオメトリクスも展開される。

斎藤論文は、新保教授の著作にたいする書評論文的である。それは、新保教授の分析枠組におけるマネタリーな面と実物的な面との関係を問うもので、その関係について、今後の検討材料としていくつかの仮説を提示している。

新保論文は、他の3論文に関連のある問題として、藩札、銭遣い、そして江戸・大阪間の卸売物価の比較を取り上げる。このうち銭遣いについては岩橋仮説を批判的に吟味したものであり、その仮説の妥当性にかんして著者はきわめて懐疑的である。これに対し他の2つの問題については、西川・谷村論文、斎藤論文にたいする批判ないしは反論というよりも、むしろ前著への補遺、あるいは新たな見解を示したものであるべきであろう。

最後に、本特集の形式について一言しておく。これは、ある意味で「シンポジウム」的な要素をもっている。とくに、西川・谷村、新保、斎藤は、岩橋論文を読んだ上で、その他の論者の討議用ペーパーを参考にしながら論文を書いたので、所収論文相互間の関連性はかなり高まったと思う。しかし他方で、それがあくまでも「紙上」シンポジウムであったため、なお討議が不徹底になったことは否めない。例えば、「銭遣い経済圏」についての新保教授のコメントは重要な指摘を含んでいるが、岩橋教授の反批判ないしは再論を載せることができなかった。また、斎藤の『近世の物価と経済』へのコメントと本特集中の新保論文とが十分に噛合っていないのも残念である。これらについて、また本特集で提起された他の問題については、今後の展開を俟つこととしたい。

(斎藤 修)